

試験研究成果普及情報

部門	内水面	対象	研究
課題名：印旛沼における魚介類のヒメガマ群落の利用			
〔要約〕 印旛沼に広く分布している抽水植物であるヒメガマ群落における魚介類の生息状況を周年にわたり調査した。同沼の水産資源であるモツゴやエビ類は、ヒメガマ群落を成育場として利用していることを明らかにした。			
キーワード [※] 印旛沼、ヒメガマ群落、魚介類、成育場			
実施機関名	主 査	水産総合研究センター	内水面水産研究所
	協力機関	なし	
実施期間	2010～2014年度		

〔目的及び背景〕

湖沼など内陸の水辺域では、魚介類と水生植物は密接な関係があり、琵琶湖や霞ヶ浦・北浦では、抽水植物であるヨシの群落を魚類の成育場として利用していることが報告されている。

近年の印旛沼でも、抽水植物であるヒメガマが木柵矢板の沖側に広く分布している。そこで、魚介類のヒメガマ群落の利用実態を明らかにすることを目的に、平成23年10月から平成27年3月まで周年、印旛沼で調査を行った。

〔成果内容〕

- 1 ヒメガマ群落は、その沖側の沼内より魚類は8～11倍、エビ類は2～7倍生息密度が高く、これらの生息密度は、ヒメガマが繁茂する7月又は8月に最高となった。
- 2 モツゴは、5月に全長10～15mmでヒメガマ群落に現れ、10月に全長50mm程度に成長していた。
- 3 テナガエビは、6～7月に全長10mm程度でヒメガマ群落に現れ、翌年3月に全長30mm程度に成長していた。
- 4 スジエビは、6月に全長10～15mmでヒメガマ群落に現れ、10～11月に全長30mm程度に成長していた。
- 5 これらのことから、印旛沼の水産資源であるモツゴやエビ類は、ヒメガマ群落を成育場として利用していることが明らかになった。

〔留意事項〕 ヒメガマ群落では魚類の産着卵が確認されなかったことから、魚類が産卵場として利用する可能性は低いと考えられた。

〔普及対象地域〕 印旛沼、手賀沼

〔行政上の措置〕

〔普及状況〕

[成果の概要]

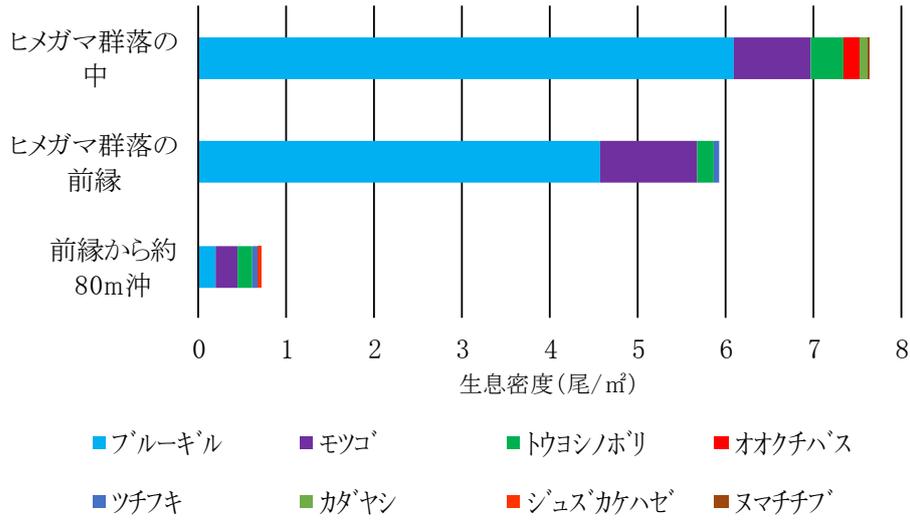


図1 ヒメガマ群落と沖側との魚類の生息密度比較

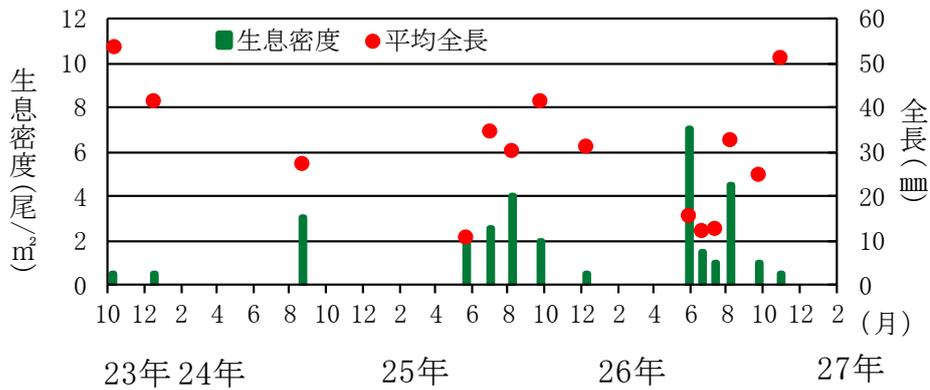


図2 ヒメガマ群落でのモツゴの出現時期と成長

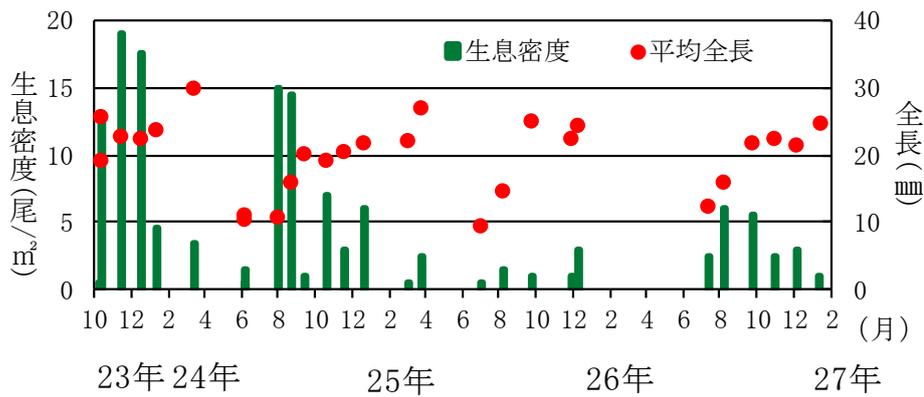


図3 ヒメガマ群落でのテナガエビの出現時期と成長

[発表及び関連文献]

[その他]